

論 文

ネワール語のテンス・アスペクトをめぐって

Issues on Tense and Aspect in Newar

桐 生 和 幸

単にまとめておく。

1 はじめに

本論文では、ネワール語のテンスとアスペクトに関して、先行研究では、あまり触れられて来なかった点を記述し、ネワール語のテンスとアスペクトの基本的な体系について論じるものである。¹⁾

ネワール語のテンスに関する研究は、Bendix (1974), Genetti (1994) 等に見られるが、十分な記述がなされているとはいえないし、多くの文献で Past vs. Non-Past の対立を示すという分類がなされているが、問題点が少なからずある。また、否定との関連においてや、従属節中のテンスと動詞の語形についての議論は、著者の知る限り、これまで研究がなされていない。

アスペクトについては、Genetti (1986) の *taye* に関する研究、Hargreaves (1991) の博士論文中での *dhune*, *taye* の研究、Kiryu (1999) の *cwane*, *taye* の研究、Kiryu (2000a) の *dhune* など、補助動詞を中心にしたアスペクトの記述が中心で、動詞自体が担うアスペクト的な点に関しては、きちんとした議論がなされていないし、否定文の中でのアスペクト的意味の記述は、桐生和幸 (1999) 以前の研究では、存在しないようである。

そこで、本論文では、これら二つの先行研究も踏まえながら、ネワール語のテンス・アスペクトを動詞の活用形を中心にしながら論じていく。よって、継続相、結果相、パーフェクトを表す補助動詞は、本議論には含めない。まずは、テンスとアスペクトとは何かを簡

1.1 テンス

人間の言語活動において、ある出来事や状態を表現するのに、その出来事や状態が時間軸上のどの地点にあるかを明らかにするのが一般的である。その際に、方法としては、現在、過去、未来という3つの時間的な区分の中で、出来事や状態を位置付けるのに動詞自体にその区別を盛り込むという手段が多く、この言語によって取られている。もちろん、この時間的な区別が動詞の形態の上で行われず、時間副詞などの別の手段によって表される言語もある。

結局、テンスとは、現在、過去、未来といった時間を言語表現上指示するための文法範疇であるが、実際の時間とテンスの形式は、必ずしも一致しないし、また、テンス自体は、Reichenbach の理論のように発話時と指示された時間軸上の点と文の表す出来事の生起時点との関係を表す直示的な特徴がある。よって、発話時の時間を基準として、それよりも前の出来事は、過去だと考えられ、それより時間的に後に起こるものは、未来だと考えられる。これは、我々の実際の時間の認識であり、この3つの時間的区別をどう言語表現として記号化しているかは、言語によって異なり、中には、時間的な区別を表す形式を持たない言語、例えば、中国語やタイ語などのような言語も少なからずあれば、また、近い未来、遠い未来などの細かな違いを表す言語もある。

Comrie (1985) によれば、多くの言語が、past/non-

past, つまり, 過去に対して現在と未来を表す形式が区別される二項対立のテンスシステムを持つという。数は少なくなるが, future/non-future の区別を持つ言語も存在しているが, 多くの場合, この違いは, irrealis/realis というムードの違いが反映されたものらしい。²⁾

1.2 アスペクト

アスペクトとは, テンスと異なり, 時間的な区別というよりも, 動作の局面を区別する文法範疇である。動詞の活用が区別するアスペクトとして有名なのは, スラブ系の言語に見られる perfective と imperfective の区別であり, Comrie (1976) の定義によれば, perfective とは, 動作全体をまとめて事態を認めるアスペクトであり, Imperfctive とは, 動作の内側からその展開の局面を見るアスペクトである。

一般的にアスペクトの区別があるのは, 動作や変化を表す動態的な意味を持つ動詞で, 状態性を表す述語, つまり, 状態動詞や形容詞は, 基本的にアスペクトの区別とは無関係である。両者を区別する簡単なテストとして, 例えば, 日本語であれば, 継続アスペクトを表す「いる」を補助動詞として取れるかで区別ができるし, 英語でも, 進行形にできるかどうかで区別が可能である。

以下の節において, ネワール語のテンス, アスペクトの特徴を見て行くことにする。その前に, 動詞の活用が表す文法範疇について, 簡単にまとめておく。

1.3 動詞の活用語尾と文法範疇

ネワール語の動詞は, 活用タイプによって伝統的に

5つの類型に分けられている。Hale (1986) が採用している分類, および, Genetti (1994) の分類に従えば, 定動詞の活用語尾の種類は, past conjunct, past disjunct, non-past conjunct, non-past disjunct, imperative, stative の6つが認められている。³⁾

これら6つの形が内包している文法的範疇は, tense, aspect, mood, person の4つの範疇が認められ, Malla (1985) によると, ネワール語の動詞の活用は, 以下の文法範疇の対立を持つとされている。

| | |
|-----------|-----------------------|
| (1) Tense | past/non-past |
| Mood | indicative/imperative |
| Person | conjunct/disjunct |
| Aspect | stative/eventive |

「行く」という意味を表す動詞 *wane*, 「知る」という意味を表す動詞 *siye* を例に取って見ることにすると, 各範疇と活用の関係は表1のようになる。ただし, 一般的に使われている non-past というラベルは, 本稿では, future というラベルに置き換えることとする。non-past というラベルが妥当ではないことは第2節で論じる。

person については, Hargreaves (1991) の中で論じられているように, evidentiality が関係していて, ネパール語やその他の印欧語に見られる人称とはその性質が異なる。evidentiality とは言っても, 同じチベット・ビルマ諸語のチベット語のような evidentiality とは異なり, ここでの conjunct/disjunct の対立は, むしろ, 自者対他者の区別に関係していると言える。⁴⁾ つまり, ある出来事に対してその計画から行動まで意識して行なっているかどうかの問題となり, 自分の行動

| MOOD | INDICATIVE | | | | IMPERATIVE | |
|-------------|------------|----------|----------|----------|------------|-----|
| ASPECT | EVENTIVE | | | STATIVE | | |
| TENSE | PAST | | FUTURE | | | |
| PERSON | CONJUNCT | DISJUNCT | CONJUNCT | DISJUNCT | | |
| <i>wane</i> | wanā | wana | wane | wani: | waā: | wā |
| <i>siye</i> | siyā | silā | si: | si: | syu: | syu |

表1: ネワール語の述語の活用が表す文法範疇

は、意識下で常に認識しているが、他人の行動は、自分の意識下で計画実行全てを認識できるわけではない。その違いが文法化されて動詞のconjunct/disjunctの違いに反映されていると言える。よって、平叙文では、1人称主語の場合は、conjunct形が使われ、2人称主語、3人称主語では、disjunct形が使われる。逆に、疑問文では、2人称主語がconjunct形になり、1人称と3人称は、disjunct形になる。また、1人称主語であっても、非意図的な動作は、disjunct形で表される。⁵⁾

- (2) a. *jī: yānā. / chā/wā: yāta.*
1sg.ERG do.PC 2/3sg.ERG do.PD
私はした。 / お前/彼はした。
- b. *chā: yānā lā? / jī/wā: yāta lā?*
2sg.ERG do.PC Q 1/3sg.ERG do.PD Q
君はしたか。 / 私/彼はしたか。
- c. *jī: yāta hā.*
1sg.ERG do.PD hearsay
僕がやったんだって。

2 ネワール語のテンス

前節の動詞の活用が表すように、一般的にネワール語が表すテンスの意味は、non-past vs. pastの対立であると考えられている (Hale, 1986; Genetti, 1994; Malla, 1985)。しかし、この分類は、かなり大雑把なもので、実際の各語尾がどのようなテンスを表すかは、人称、動詞の種類、肯定か否定かによって異なり、単純な図式として捉えることはできない。以下、それぞれの人称における時制の表し方がどのようにになっているのかを動詞の種類とともに論じる。

2.1 活用形とテンス

表1において分かるように、基本的にテンスの対立は、eventiveの形において見られる。conjunctとdisjunctの対立が、pastとfutureの両方において見られる。past形は、過去における事態の成立を表し(3)、future形は、未来における事態の成立を表す(4)。non-

pastという呼称は、実際には、現在、未来を内包しているはずだが、実際には、出来事の成立を表す場合、未来の出来事の成立しか表さない。この点、テンス的には、past vs. futureの対立と考えることも可能である。⁶⁾

- (3) a. *Ji wanā.*
1sg.ABS go.PC
私は行った。
- b. *Rām wana.*
3sg.ABS go.PD
ラムは行った。
- (4) a. *Ji wane.*
1sg.ABS go.FC
私は行く。
- b. *Rām wani.*
3sg.ABS go.FD
ラムは行く。

ここで現在時制がどのように表されるかが問題になる。現在時制というのは、Comrie (1985), Bybee, Perkins, and Pagliuca (1984) で述べられているように、基本的には、発話時における出来事や状態を表すテンスであると言えるが、ネワール語の場合、状態性述語の場合、その状態形で現在の状態を表すことができるものの、出来事動詞の場合は、継続を表す補助動詞*cwane*を使用する必要がある。スペイン語、ドイツ語、朝鮮語などは、現在形がそのまま、眼前の出来事を表すことができるのとは対照的である。

英語でもそうであるが、一般的に現在の習慣は、現在時制で表されるものの、テンスではなくアスペクトの一範疇として考えられている (Comrie, 1976)。ネワール語の習慣に関しては、詳細をここで述べることは避けるが、面白い特徴としては、原則、1人称主語の場合は、past/future conjunct形のどちらも使うことができ、3人称主語の場合は、stative または future disjunct を使うことができる。どちらの形を使うかに関しては、頻度、肯定か否定か、平叙文なのか疑問文なのかなどのいくつかの要因によってその分布が決まる。多くの言語では、現在形が現在の習慣を表すか、

あるいは、現在形とは別に習慣を専門に表す形がある (Comrie, 1985; Bybee et al., 1984) が、ネワール語は過去の形式、未来の形式、状態形の3つの形が習慣を表すのに関与している点で興味い。また、テンシ的な区別は無く、頻度に関してどの形式を使うかが異なる。紙面の関係上、ここでは、簡単に例を上げるに止める。

- (5) a. *ji apwaryānā: khu-tā il-e*
 1sg.ABS usually six-CL time-LOC
dane-gu. gubalē: gubalē: nhae-tā
 get.up.FC-NL sometimes seven-CL
il-e danā.
 time-LOC get.up.PC
 私は、普段6時に起きます。時々、7時に起きます。
- b. *wā: lhātī: nai. aesā: cāmcā:*
 3sg.ERG hand.ERG eat.PC but spoon.ERG
nā: nai.
 also eat.ST
 彼は、手で食べるが、スプーンでも食べる。

基本的に、頻度の高い習慣の場合は、future 形が使われ、頻度の低い習慣の場合は、evidential subject は past conjunct 形を、それ以外の主語は状態形を取る。ただし、実際にどちらの形が使われるかは、単純ではなく、-gu がつくかどうか、否定かどうかなど、いくつかの要因が絡んでいる。⁷⁾

ここで問題になって来るのは、stative の扱いである。動作や変化を表す動詞の場合、テンシ的には、活用で表されるのは、過去と未来のみである。Malla の分類に基づく表1からは、stative はテンスの対立を表さないように見受けられるが、実際は、過去または現在時の状態しか表すことができない。未来の状態を表すには、future disjunct の形を取る。⁸⁾

- (6) a. *thāū/mhiga: lā jike dhebā*
 today/yesterday EMPH 1sg.come money.ABS
yakwa du.
 much exist.ST

今日はたくさんお金がある。／昨日はお金がたくさんあった。

- b. *kanhae jike dhebā yakwa*
 tomorrow 1sg.come money.ABS much
dai.
 exist.FD
 明日私にはたくさんお金が入る。

また、従属節における状態形の役割に関しても着目する必要がある。主節においては、eventive 形が過去の事態の成立を表す。しかし、evidential でない主語を取る動詞の場合、過去の出来事は、従属節においては、past disjunct 形の代わりに、状態形が用いられる。

- (7) a. *Rām wala.*
 Ram come.PD
 ラムが来た。
- b. *Rām wa:-gulī: jyā suruyāye nu.*
 Ram come.ST-because work start.FC PART
 ラムが来たから、仕事を始めよう。

(7b) では、「来た」ということが主節では、wala という eventive 形で、従属節では、wa: という状態形で表されている。

また、past 形が現在のことを表せる場合がある。アスペクトを表す助動詞 *cwane, taye* などは、過去の継続状態や結果状態を表すだけではなく、現在の進行や結果状態も表すことができる。

- (8) a. *Rām-ā: ākha: bwanā cwana.*
 Ram-ERG letter read.CP stay.PD
 ラムは、勉強していた／勉強している。
- b. *simā-e lā: khāyā tala.*
 tree-LOC shirt.ABS hung.CP put.PD
 木にシャツが引っかけてあった。／引っかけてある。

これらのことを考慮すると、past と分類されている活用形は、意味的に過去のみを表す形式ではないし、non-past とされている形は、non-past が本来含むべき

現在の出来事を表すことはないのであるから、past vs. non-past の対立とは認められず、non-future vs future の対立であると考えの方が妥当だと言える。

3 従属節中のテンス

これまでの議論は、主節定動詞の位置に現れた場合を扱って来た。従属節中のテンスは、言語によっては、日本語のように主節の動詞の時間より前か後かを区別する相対テンスであったり、英語のように時制の一致により絶対的に時間を指し示す絶対テンス的特徴が見られる。ネワール語の場合は、基本的には、絶対テンス的であり、文中で表されている出来事が過去のことであれば、past形が使われ、未来のことであれば、future形が使われる。

ネワール語では、基本的に絶対テンスの特徴を持つと考えて良いが、従属節中の動詞があるテンスを表す場合の動詞の形は、接続詞、主語によって異なる。基本的には、conjunct の場合、主節の動詞の場合と同じ形が現れるのに対して、disjunct の場合、未来のことを表すには、主節と同じく future 形が使われるが、過去のことを表す場合、disjunct 形は使われず、状態形が使われる。また、状態を表す場合は、主節の場合と同じく現在または過去の事態には状態形が、未来の事態には、future形が使われる。従属節の種類として、時間を表す節、理由を表す節、逆接を表す節がある。それぞれの節の中で現れる動詞の活用をテンス的区別の有無により簡単にまとめる。

3.1 テンス的区別がある場合

まず、基本則に従うのは、時を表す *-bale* ‘when’, 理由を表す *-gulī:* ‘because’, 名詞節を導く *-gu*, 関係詞 *-gu, mha, -pī:*, 譲歩節を表す *sā:* である。これらの節では、past disjunct の代わりに状態形が現れる。

- (9) a. *Nepāl-e wanā-bale nhu:-gu lā:*
Nepal-LOC go.PC-when new-REL shirt.ABS
suikā.
sew.PC

(私は、)ネパールへ行ったとき、新しいシャツを作った。

- b. *Nepāl-e wā:-bale nhu:-gu lā:*
Nepal-LOC go.ST-when new-REL shirt.ABS
suikala.
sew.PD

(彼は、)ネパールへ行ったとき、新しいシャツを作った。

- c. *kanhae nhu:-mha manu: wai-bale*
tomorrow new-NL man.ABS come.FD-when
thwa saphu: wai-ta byu
this book.ABS 3sg-DAT give.IMP
明日新しい人が来たら、この本をやってくれ。

- (10) a. *wa wa:-gulī: jyā*
3sg.ABS come.ST-because work.ABS
suruyāye-nu
begin.FC-let’s
彼が来たから、仕事を始めよう。

- b. *ji kanhae waye*
1sg.ABS tomorrow come.FC
phai-makhu-gulī: chimisā ji-gulāgi
can.FD-NEG-because you.ERG 1sg-for
khā nyenā hayā biyā disā
story.ABS hear.CP bring.CP give.CP please
nhi
PART
私は明日行けないから、あなたたちが私の代わりに話を聞いて来てくれませんか。

- (11) a. *Ram ma-wā:-sā: ji lā*
Ram.ABS NEG-go.ST-though 1sg.ABS PART
wanā.
go.PD
ラムは行かなかったけれど、僕は行った。

- b. *Rāma wani:-makhu-sā: ji lā*
Ram.ABS go.FD-NEG-though 1sg.ABS PART
wane.
go.FC
ラムは行かないけれど、僕は行く。

(12) a. *jī: nakatini nāpalānā cwanā-pī:*
 1sg.ERG just.now meet.CP stay.PC-REL.PL
manu:-ta jimi pāsā-pī: kha:
 man-PL my friend-PL COPULA
 私がさっき会っていたのは、私の友達です。

b. *kanhae thana wai-mha misā*
 tomorrow here come.FD-REL woman.ABS
mhasyu: lā?
 know.ST Q
 明日ここに来る女性を知っていますか。

ここで、一つ取り上げておきたいことは、主節であっても、従属節のパターンに従う場合があるということである。これは、名詞化接辞である *-gu* が、主節のおしまいについて、終助詞的に働いている場合である。統語的には、文全体を名詞化し、日本語の文末「のだ」に近い働きをするのであるが、この場合も、統語的には、従属節のようになるため、基本則に従う。

(13) a. *wā: chu nala?*
 3sg.ERG what eat.PD
 彼は、何を食べましたか。

b. *wā: chu na:-gu?*
 3sg.ERG what eat.ST-NL
 彼は、何を食べたんですか。

上の例では、*-gu* がつくことにより、動詞は、past disjunct ではなく状態形にならなければならない。⁸⁾

3.2 テンス的区別の無い場合

次に、基本則に従わない場合の例をあげる。基本則に従わず、主語や時制に関係なく常に同じ形を取るのは、時の接続詞のうち *nhya:* ‘before’, *dhū:kā:* ‘after’, *wā:* ‘as soon as’ である。上の3つの接続詞の前では、動詞は全て future conjunct の形で現れる。また、条件節の場合、必然条件を表す *ki* の場合は、past disjunct を取る。⁹⁾

(14) a. *beli naye-nhya:/dhū:kā:/wā:*
 dinner.ABS eat.FC-before/after/as.soon.as
tibhi: swayā.
 TV.ABS watch.PC
 夕食を食べる前/食べた後/食べてすぐにテレビを見た。

b. *beli naye-nhya:/dhū:kā:/wā:*
 dinner.ABS eat.FC-before/after/as.soon.as
tibhi: swayā.
 TV.ABS watch.FC
 夕食を食べる前/食べた後/食べてすぐにテレビを見る。

c. *thwa lā tappyā:ka wana-ki*
 this road.ABS straight go.PD-when
bazaar-e thyenī.
 bazar-LOC arrive.FD
 この道をまっすぐ行けば、市場に着く。

また、*sā* の場合は、二通りの形が可能で、高い可能性のある条件を表す場合は、状態形が、それほど高くない可能性のある条件を表す場合は、future disjunct が用いられる。ただし、人称制限があり、1人称は、future disjunct を取ることはできない。

(15) a. *Rām wā:-sā ji nā: wane kā.*
 Ram.ABS go.ST-if 1sg.ABS also go.FC PART
 ラムが行くなら、僕も行くさ。

b. *Rām wani:-sā ji nā: wane kā.*
 Ram.ABS go.FD-if 1sg.ABS also go.FC PART
 ラムが行くなら、僕も行くさ。

どちらの文も、未来のことに対する条件文となっているが、(15a) では、ラムが行くかどうかの可能性は、はっきりしておらず、逆に (15b) では、ラムが行かない可能性が高いということを表す。

3.3 従属の度合とテンス表示の関係

以上の考察から分かるように、テンス的区別があったり、無かったりというように、従属節によって、テンスの表示の仕方が異なるのであるが、これは、従属

の度合が異なるからだと考えられる。譲歩、理由を表す節では、ある程度主節に対する従属の度合が低いと考えられる。また、時の接続詞でも、*bale* という絶対的な時間軸を指す場合は、従属度が低く、独立して、テンスの区別をするが、逆に、前後関係や同時性を表す *nyar*, *dhū:kā:*, *wā:*などは、主節に対する従属度が高いため、テンスの区別は、主節に依存する、という形になっている。

テンスの区別をする従属節でも、主節に従属するという点では、従属度がある程度あるため、普通、*evidential* や 話者の態度表明などのモーダルな要素は入れることができない。ところが、引用節を導く *dhakā:* は、節自体が従属度が極めて低く、モーダルな要素も取ることができる。これは、ネワール語では、話法が直接話法に近いからだと言える。

- (16) a. *Rām-ā jita dāla dhakā: macā:*
 Ram-ERG 1sg.DAT hit.PD QUOTE child.ERG
dhāla.
 say.PD
 ラムが僕を叩いたんだと子供が言った。

- b. *Rām-ā: wā:-gu dā-e bhārata-e*
 Ram-ERG go.ST-NL year-LOC India-LOC
wanā wayā dhakā: dhāla.
 go.CP come.PC QUOTE say.PD
 ラムは、去年インドへ行って来たと言った。

b の例から分かるように、ラムが言った内容は、その行為が内容の発話者の視点から語られたものであるので、テンスの要素はもちろん、*wayā* のように Ram を *evidential subject* として *past conjunct* が使われている。

4 ネワール語におけるテンスという文法範疇の位置付け

初めに触れたように、これまでのネワール語の研究では、*eventive* で見られる形態的区別をテンスの対立である *past vs. non-past* と位置付けて来ている。しかし、これまで見て来た事実を考えると、妥当な解釈と

は言えず、テンスの観点からすると、実際の対立は、*non-future vs. future* という対立になっていると言える。

先に論じたように、状態を表す形は、現在または過去の状態しか表すことができず、未来の状態を表すには、*eventive* の形を使わなくてはならないし、また、*eventive* の形であっても、状態的な切口をする *cwane*, *taye* などのアスペクトの補助動詞は、*past* 形で現在の状態も過去の状態も表すことができるということから支持される。

Bendix (1974) では、*past disjunct* を状態形の異形態として扱っている。Bendix 自身は、なぜそのような立場を取るのかについては何も理由を述べていないが、この考え方は、従属節の例で見たように、*past disjunct* の形が従属節の中では具現化せず、主節の言い切りの形としてしか現れないという特徴を考えると、あながち根拠が無いことでもない。よって、*non-evidential* な主語の場合も、対立は、*future vs. non-future* という対立に収まるといえる。

Bhat (1999) では、テンス、アスペクト、モダリティという3つの文法範疇に関して、言語は、いずれかの範疇に関して卓立性 (*prominence*) を示すと論じている。つまり、3つのうちのどれか一つが支配的なカテゴリーとなっている場合が多く、その卓立したカテゴリーは、常に優先的に区別される、というのである。例えば、英語は、テンスが卓立しており、必ずテンスの区別がなされるが、それ以外のカテゴリーは、その区別がなされない。

Future vs. non-future の対立が、モーダルな対立である、*irrealis vs. realis* の対立に対応するのであれば、ネワール語は、モダリティが卓立した言語だということができる。実際に、テンスではなく、モダリティが卓立していることを示す例が反実仮想を表す場合に見られる。この場合、テンスの区別は、全くなされていない。以下の例を検討してみよう。

- (17) a. *abale jike dhebā du:-gu*
 then 1sg.COM money.ABS exist.ST-NL

ju:-sā jī: wa saphu: nyāi
 become.ST-if 1sg.ERG that book.ABS buy.FD
kā.

PART

もしその時お金があったら、その本を買っていたのに(実際は、お金が無かったので買えなかった)。

- b. *kanhae Rām wani:-gu ju:-sā*
 tomorrow Ram.ABS go.FD-NL become.ST-if
jī nā: wani: kā
 1sg.ABS also go.FD PART
 明日ラムが行くんだったら、僕も行くんだけ
 どなあ。

(17a) は、過去の事実に対する反実仮想、(17b) は、未来の事実に対する反実仮想である。英語でも、日本語でも、テンスの区別がなされるはずであるが、ネワール語では全くその区別が無い。上の例文で注意したいのは、主節の動詞で、それぞれ、*nyāi*, *wani:* と future disjunct が使われており、過去と未来の時制的な区別がないことである。日本語では、「買った」「死んだ」と過去形が使われているのとは異なる。過去の非現実であっても、実現しなかった事態、つまり、irrealis として捉えられているため、過去形が使えないと言うことが言える。¹⁰⁾ また、(17b) の文自体は、*wani:* を取ることで、反実仮想を表しているが、*wane* を代わりに取った場合、従属節の形式はそのまま、単なる未来の条件文となる。*wani:* という future disjunct を取ると、Ram が行かないから、私が行く可能性は無い、ということを述べ立てているのに対して、*wane* となると、「Ram が行く」という条件が合えば、話者である「私」も行くつもりである、ということになる。

5 否定とアスペクト

筆者の知る範囲では、これまでの研究では、桐生和幸 (1999) 以外にテンス・アスペクトと否定の関係を論じているものは無い。ネワール語の否定については、先行研究などでも触れられているように、一つの特徴

として、past と future とでは異なる形を取るという事実がある。例えば、Malla (1985, 87-88) では、「行く」という意味の *wane* の否定は、past conjunct が *ma-wanā*, past disjunct が *ma-wana*, future conjunct が *wane makhu*, future disjunct が *wani: makhu* とされている。¹¹⁾ つまり、過去の出来事の否定の形式では、*ma-*を取り、未来の出来事の否定の場合は、*makhu* を後ろに取るわけである。

Evidential でない主語の過去の出来事の否定の形式に関しては、少し注意する必要がある。Genetti (1994) では、past disjunct の否定は、*ma-wana* ではなく、*ma-wā:* と状態形の否定になると指摘している。Malla と Genetti の間で、past disjunct の否定形に関して、齟齬があるように思われるが、実際は、どちらも正しいと言える。厳密な意味での、過去形の否定は、Genetti が言うように、状態形の否定になる。

- (18) *thāū: Rām ma-wa:*
 today Ram.ABS NEG-come.ST
 今日ラムは来なかった。

では、Malla があげている past disjunct の否定形はどのような意味を表すのか。桐生 (1999) で論じたように、この past disjunct 形の否定が表す意味は、確かに、「行った」と「行かなかった」の単純に肯定と否定の対立には関係しない代わりに、肯定事態の反対の状態の成立を表す。

- (19) *thāū: Rām ma-wala.*
 today Ram.ABS NEG-come.PD
 今日ラムは(結局)来なかった。

「今日」という時間的副詞があるため、日本語では、両者に差が無いように見えるが、(19) の方は、単に来なかったということを表すのではなしに、来るはずのラムが来なかったという意味を表す。よって、単に今日ラムが来なかったかを尋ねる場合の答えとしては、*ma-wa:* の方がふさわしく、ラムが来ることになっていて、来ると期待していたのに来なかった、ということを表す場合、*ma-wala* というのである。

また、この *ma-wala* は、日本語であれば、「来なくなった」という意味も表す。これは、前提として、これまでラムが続けて来ていたのに、来るのを止めた、ということの意味する。

反対の状態の成立を典型的に表すのは、活動動詞ではなく、変化動詞であると言える。変化動詞は、本来、ある状態の成立を意味するわけであり、その *past disjunct* の否定形は、語幹が表す状態の終息を表す。つまり、*past disjunct* の否定は、これまで続いて来た状態が終る、反対の状態になることを表し、否定の *ma-*よりも *disjunct* の接辞の持つ意味の方が、スコープが広いということになる。この点で、印欧語の否定や日本語の否定とは異なる。¹²⁾

(20) a. *la: ma-wala.*
water.ABS NEG-come.PD
水がでなくなった。

b. *ji sekhā: ma-cāla.*
1sg.ABS cold NEG-feel.PD
私は、風邪が直った。(lit. 私は、風邪を感じなくなった。)

このような反対の状態の成立を表すのは、*past Disjunct* だけではなく、*future disjunct* においても観察される。*makhu* を使った否定は、未来のある一時点で、動詞が指す出来事や状態が成立しないと言う不成立を表すのに対して、*ma+future disjunct* の場合は、ある未来の一時点での、動詞が指す状態が終息することを表す。

(21) a. *thwa jyā thāū: sidhai-makhu.*
this work today finish.FD-NEG
この仕事は、今日終わらない。

b. *il-e si-ma-dhai. yakanā:*
time-LOC finish-NEG-finish.PD quickly
yā.
do.IMP
時間通りに終らなくなるぞ。早くやれ。

(21) a. *ā:taka yakwa la: chelā-gulī:*
now-upto much water.ABS use.PC-because
kanhae-yāta dai-makhu.
tomorrow-DAT exist.FD-NEG

これまでたくさん水を使ったので、明日の分は無い(だろう)。

b. *yakwa la: chela-ki lipā-yāta ma-dai*
much water use.ST-if later-DAT NEG-exist.FD
kā.

PART

たくさん水を使ったら、後の分が無くなるぞ。

daye という動詞は、普通、状態形 *du* で多く用いられる。しかし、上の例でもあるように、*eventive* 形が表す意味は、変化動詞の意味であり、まさに、*come into existence* という意味を表す。

結局、否定を考えた場合、ネワール語のアスペクト的な基本対立として、*eventive* 対 *stative* という構図がはっきりとして来る。つまり、*eventive* は、ある状況の動的な成立を表し、*stative* は、ある状況が静的に存在することを表す。ある状況の成立が実現しないという否定的な描写を考えた場合、その状況の成立以前から続く状態に変化が無いことを意味する。このことを鑑みると、ネワール語の過去の状況成立の否定が状態形の否定で表されるということは、別段不思議でもない。このことから、ネワール語の *eventive* 形の語尾は、「事態の成立」と言うことを表す働きがあると結論づけることができる。

一つ不思議なのは、未来の否定の表し方である。未来の否定に関しては、過去の否定とことなり、*makhu* という言葉が、*eventive* 形の後に付けられる。*makhu* は、形態的には、否定辞 *ma-*と、コピュラ動詞の状態形 *khu* からなっているので、「～のではない」という意味になる。*wai makhu* と言うのは、直訳すれば、「来るのではない」という意味になる。この *makhu* は、過去の動詞に付けることはできないし、また、実際の意味として、未来の事態の否定辞としてしか機能しておらず、文字通り未来の事態を「～のではない」という場合には、*-gu makhu* と間に名詞化辞が介在する

(日本語の「の」と同じ)。また、逆に、状態形の否定を未来に使うこともできない。結局、未来の否定と過去の否定に差があると言うのは、ネワール語の根源的な語形の対立にアスペクトとは別の要素が関係しているからだと考えることができる。その要素とは、テンスの時と同じく、モダリティーが基盤にあると言えるのではないだろうか。つまり、事実として捉えるか非事実として捉えるかという *realis/irrealis* の対立が関係していて、成立した出来事は、事実 (*realis*) であり、成立していない出来事は、非事実 (*irrealis*) であると言える。

このことに対する反例となりそうなのは、例えば、未完了を表す場合、*ma-wa:-ni* [NEG-come.ST-PART] というように過去の形式に以前の状態が変化していないことを表す助詞 *ni* をつけるという例がある。つまり、まだ来ることが実現していないということを表すのに過去の形式である状態形を用いている。しかし、これは、実際は、反例にはならないだろう。というのも、未完了は、概念的にはその動作が未実現ではあるが、*ma-wa:-ni* が文字通り表す意味は、未実現ではない。*ni* の働きは、ある状態が依然として存在するということにあり、*ma-wa:-ni* という形式が文字通り表しているのは、「来る」ということが成立する以前の「来ていない」状態が依然として続いているということだからである。その否定的な状態は、既に成立しているわけで、*realis* であると言える。

6 結び

本論文では、ネワール語の動詞の活用が表すテンス、アスペクトの体系を記述して来た。本論文の主張をまとめておく。まず、これまで言われて来たように、テンスに関しては、*past vs. non-past* ではなく、*future vs. non-future* の対立であるということ。また、アスペクト的な対立は、*eventive vs. stative* が根底にあり、否定との関係で、その違いがはっきりと現れると言うことを論じた。このアスペクトの *eventive vs. stative* という対立にしても、事態の成立の認識が表明されている

と考えれば、多分にモダリティー的な意味基盤に立脚していると言える。そうなると、いよいよ、ネワール語は、卓立性に関しては、モダリティーが支配的であると結論づけることができる。

しかし、だからと言って、ネワール語にテンスやアスペクトが認められない、と言うことにはならない。つまり、*future vs. non-future* という対立が、*irrealis vs. realis* という対立を内包しているとは言っても、ネワール語のあらゆる場面で、*realis vs. irrealis* の対立があるわけではない。実際、反実仮想文では、モダリティー的部分が現れるのは、主節においてのみで、従属節では、モダリティーの要素が現れない代わりに、テンス的な要素が出現し、区別を保っている。テンスではなく、モダリティーの対立であると主張することも可能かもしれないが、現時点では、十分な証拠が無いので、テンス的な対立と認めておく。

今回は、アスペクトのうち、*habitual* に関して十分に論じなかったが、*habitual* が、ネワール語では、アスペクト的な基盤に基づいて表現されていると言うよりは、やはり、モダリティー的な要因が関係していると考えられる。この点の議論は、現在論文を準備中で、その中で論を展開したい。また、今後の課題としては、動詞の活用形が表すモーダルな要素についても *evidentiality* 以外の観点からも検討する必要があるということがある。例えば、まだ、十分調べが付いていないが、いわゆる *future* 形で *-gu* が付くときと付かないときでは、意味の差がモダリティーの点で認められるように筆者は感じている。

註

- 1) 本研究は、日本科学協会笹川科学研究助成金の援助を得て、平成11年から平成12年の2年に渡って行われた「日本語・ネワール語のテンス・アスペクトの対照研究」の成果の一部である。データの収集は、主に、日本でのネワール語のインフォーマント、および、ネパールのインフォーマントとの対面聞き取り調査とネパールで収集したネワール語の物語、子ども向け雑誌を元に行っている。ネワール語のインフォーマントとして協力してくださっ

た倉敷科学芸術大学の Sujeet Pradhan 氏, 現地の Manik Ratna Shakya 氏, Shasi R. Tandukar 氏, Lata Shakya 女士に感謝の意を述べたい。4人のインフォーマントは、全てバタン市出身者であり、その意味で、バタン方言のデータが主である。ただし、カトマンズ市とバタン市とは隣接しており、また、両者の方言は、若干の差異を除いて、ほとんど差が無い。

ネワール語の典型的な特徴としては、次のようなことがあげられる。基本語順は、SOVである。ただし、会話中においては、良く主語が文末に来ることがある。また、主要部と従属部の関係は、AN, GN, ReINと主要部後置型の語順を取る。形態的には、膠着型の特徴を示し、格表示は、能格型である。能格型と言っても、かなり、意味に基づいたマーキングが行なわれる。目的語のようなものであっても、全体的な影響が少ないと考えられると場所格になるような例もあるし、道具的だと考えられると、能格で表示されることもある。詳細は、桐生(2000)の文法概説を参照のこと。動詞の屈折に関しては、以下で述べるように、テンスとモダリティが融合した形で区別される。

また、グロスには、以下の略号を用いている。ABS-absolutive, CP-connective participle, DAT-dative, EMPH-emphatic particle, ERG-ergative, FC-future conjunct, FD-future disjunct, GEN-genitive, LOC-locative, NEG-negation, NL-nominalizer, PART-particle, PC-past conjunct, PD-past disjunct, Q-question particle, REL-relativizer, ST-stative

- 2) これは、あることを事実として表明するか、非事実として表明するのかという話者の態度の現れであり、命題が真であるかどうかとは直接関係の無いことが多い (Bybee et al., 1984)。
- 3) Hale の分類では、stative ではなく、Long form という名称が用いられているが、定動詞の位置で現れる場合、意味的に状態を表すので、Genetti の名付けに従うことにする。
- 4) 詳しくは、Kiryu (2000b) を参照。
- 5) 一人称主語で、本来はconjunct 形を取る動詞が disjunct 形を取る場合は、文末に *hā* 「そうだ」や *khanisā* 「ようだ」と言った evidential marker がつく。
- 6) ただし、以下で述べるように状態形や継続の aspekto を表す *cwane*、結果の aspekto を表す *taye* は、その past 形が現在の状態を表すこともできる。
- 7) この点については、現在論文を準備中である。
- 8) 例外が一つだけあり、存在を表す *du* が仕事などの予定を表す場合、それが、確実な予定であれば、*du* で未来の状態を表すことができる。その他の状態形は、future 形でなければならない。ちなみに、未来の予定を *dai* で表

わす場合は、「あるだろう」のような不確定性が含意される。

- 9) この *-gu* の意味機能は、命題を直接的に提示するのではなく、名詞化することで間接的に提示する働きがある。そのため、疑問文で、相手の知っていると思われることを尋ねる場合に、軟らかく尋ねると言うニュアンスを生み出す。
- 10) さらに、1人称主語であるにもかかわらず、disjunct の形になっている。このことは、非現実なことは、実行不可能であるから、事態をコントロールできないために conjunct が取れないと言える。

非現実のことを述べ立てる場合、あくまでも推測の域をでないため、主節の動詞には、推測を表す表現 (*-gu*) *ju* が付いたり、あるいは、*kā* のようなモダリティをあらわす助詞が付かなければ不自然な文になる。未来の条件を表す場合は、主節の動詞は、未来形を表す形になるが、推測を表す *ju* は付かない。

従属節では、過去のことには状態形が使われており、未来のことには、future disjunct が使われている。これは、おそらく、従属節においては、モーダルな意味が反映されにくいいため、テンス的区別が表面化していると考えられる。

- 11) Malla は、テンスの対立として、past/non-past を取っているはずなのだが、この例をあげるときには、non-past を future としている。
- 12) このように、否定が反対の状態の成立を表せる言語は、ネワール語に限ったことではないようである。筆者の調査によれば、中国語やタイ語でも、全く同じではないものの、完了を表す言語形式と否定が組合わさった場合、反対の状態の成立を表せる。詳細は、現在論文を準備中。

註

- Bendix, E. H. (1974). Indo-Aryan and Tibeto-Burman contact, as seen through Nepali and Newari verb tenses. *International Journal of Dravidian Languages*, 3, 42-59.
- Bhat, D. (1999). *The Prominence of Tense, Aspect and Mood*. John Benjamins, Amsterdam.
- Bybee, J., Perkins, R., & Pagliuca, W. (1984). *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago University Press, Chicago.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Comrie, B. (1985). *Tense*. Cambridge University Press, London.
- Genetti, C. (1986). The grammaticalization of the Newari verb *tal-*.

- LTBA, 9.2, 53-70.
- Genetti, C. (1994). *A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Newari Dialect*. Monumenta Serindica 24. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Hale, A. (1986). *User's Guide to the Newari Dictionary*, pp. xxiii-xlvi. In Manandhar (1986).
- Hargreaves, D. J. (1991). *The concept of intentional action in the grammar of Kathmandu Newari*. Ph.D. dissertation, The University of Oregon.
- Kiryu, K. (1999). A contrastive study of aspectual auxiliary verbs in Newari and Japanese: with special reference to *cwane* and *taye*. *Nepalese Linguistics*, 16, 41-3.
- Kiryu, K. (2000a). A Note on Perfect Aspect in Newari. *Bulletin of Mimasaka Women's College, Mimasaka Women's Junior College*, 45-50.
- Kiryu, K. (2000b). Types of Verbs and Functions of the Causative Suffix *-k* in Newari. a paper presented at Sixth Himalayan Languages Symposium, The University of Wisconsin, Milwaukee.
- Malla, K. P. (1985). *The Newari Language: A Working Outline*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
- Manandhar, T. L. (1986). *Newari-English Dictionary: Modern Language of Kathmandu Valley*. Agam Kala Prakashan, Delhi.
- 桐生和幸 (1999). ネワール語のテンス・アスペクトと否定. 日本言語学会第 119 回大会予稿集, 207-212. 日本言語学会.
- 桐生和幸 (2000). ネワール語基本動詞用例集. 文部省科学研究補助金萌芽的研究『日・ネワール語の対照述語研究』研究成果報告書.
- (2000年12月1日 受理)